

列車しか 持ち得ないもの



イラスト・岡林玲生

乗りものでは断然、列車が好きだ。異国を旅している際の移動手段は、できるだけ列車を使う。飛行機でいけば二時間のところを、列車でまる一日かかったとしても、列車を選んでしまう。列車には、バスとは異なる解放感がある。乗客同士が不思議に心を許し合う。隣り合った家族連れが、蜜柑をくれたり、お菓子をわけてくれたりするのには、必ず列車である。長距離バスではそうしたことはない。

ベトナムのハノイからホーチミンまで、途中下車しながら一カ月かけて移動したときも、列車を乗り継いだ。夜行列車は三段ベッドで、朝になるとそれが座席になる。ニヤチャンからホーチミンへ向かう列車に乗ったときは、私のベッドのまわりの乗客はみなはやばやと目を覚ましてしまった。職員がベッドをシートにかえてくれるまでのあいだ、六人でい

ちばん下のベッドに腰かけ、あれこれと話をした。少しの英語しか話せない私と、フランス語なら話せる老人と、ベトナムの言葉しか話せない家族連れが、下段ベッドにぎゅうぎゅうになつて座り、あれこれ会話をしたのだが、今思い出すと、私たちはいったい何語でコミュニケーションをとっていたのだろうか、と不思議になる。それでもそのときは、なんの疑問も感じず、話し、笑っていたのである。

早朝の駅で列車が止まったとき、家族連れのおかあさんが、駅のためご売りが茹でたまごを買ってきた。殻の茶色く染まったそれを、遠慮がちにひとつ私にくれた。いいですよ、と遠慮すると、わざわざ殻をむいて、もう一度手渡す。銀ホイルに包まれた塩をつけて茹でたまごを一口嚙ると、たちまち私は子どもに

戻った。父と母と姉と、向かい合わせでボックスシートに腰かけている。母の手で茹でたまごがむかれる。たまごを包んでいた銀ホイルが、窓からの陽にちかちか反射して母の手が光る。父は眠っている。窓の外に知らない光景が広がり、私は不安を隠すため、わざとはしゃぐ。はしゃぐうち、本当に興奮してくる。知らないところに行くのだという興奮。はしゃぎすぎて母にたしなめられる。やがて窓の外に海が広がり、私は窓に額をつける。

職員がベッドをシートにかえにきて、私は現実に戻る。私たちは座席でまた、どの言葉でもなく話し続ける。故郷のいい食べ物のこと。線路沿いに建つちいさな家から子どもたちが飛び出してきた、列車に向かって大きく手をふつてい

た。

列車というのはだんだん、バスや飛行機にとつてかわられていく。異国を旅しているとなおのこと実感する。同じ場所に行くのに、長距離バスのほうが値段が安く、しかも早い。あるいは飛行機ならば値段は高いが時間はすさまじく短縮できる。しかしそうやってみて思うのは、長距離を走る列車というのは、今や余裕のある人しか乗らないということになる。経済的余裕というよりはむしろ、時間的余裕、気持ちの余裕である。私はその余裕を美しいと思う。ともに乗り合つた乗客たちと言葉を交わし、弁当を広げ、車窓の眺めに目を凝らし、手をふる子どもに手をふりかえし、見知らぬ駅で降り降りする人をぼんやり眺める、そんな余裕を美しいと思う。列車しか持ち得ない美しさである。

文・角田光代 Mitsuyo KAKUTA

1990年『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞、小説家としてデビュー。『まどろむ夜のUFO』(野間文芸新人賞)、『ぼくはきみのおにいさん』(坪田譲治文学賞)、『キッドナップ・ツアー』(産経児童出版文化賞フジテレビ賞・路傍の石文学賞)、『空中庭園』(婦人公論文芸賞)、『対岸の彼女』(直木賞)、『ロック母』(川端康成文学賞)、『八日目の蟬』(中央公論文芸賞受賞)などの代表作のほか著書多数。近著に『予定日はジミー・ベイジ』(白泉社)、『三面記事小説』(文藝春秋)。

